

琉球大学学術リポジトリ

詠み歌琉歌の基礎的研究 『琉球新報』 『沖縄毎日新聞』 に掲載された大正期の琉歌

メタデータ	言語: 出版者: 前城淳子 公開日: 2009-06-12 キーワード (Ja): 琉歌, 詠み歌, データベース, データベース化, 節組琉歌集 キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10907

詠み歌琉歌の基礎的研究

『琉球新報』『沖縄毎日新聞』に掲載された大正期の琉歌

平成14～16年度科学研究費補助金《若手研究（B）》

研究成果報告書

平成17年3月

研究代表者 前城淳子

琉球大学法文学部

はしがき

本編は、現存する沖縄の大正期の新聞（『琉球新報』大正元年～大正七年、『沖縄毎日新聞』大正元年～大正三年）に掲載された琉歌を集めたものである。

仲程昌徳は「明治琉歌概説」（『近代琉歌の基礎的研究』一九九九年 勉誠出版）のなかで明治末期の琉歌壇の状況について次のように書いている。

明治末期、一見、琉歌の時代とでも言えるような状況が現出させた。それは、一方で新聞読者たちの、読者欄への琉歌投稿といった一種のブームが起こったことにもよるが、何よりも、伝統的な表現に対する危機が、旧派の歌人たちが奮い立たせたことによつていよう。そして、彼等の歌を否定するかたちで、琉歌の革新を唱え、新しい琉歌を創作するのに打ち込んだ作者たちの相次ぐ登場が、なお一層琉歌壇を活気付かせたのも間違いない。しかし、前者には、もはや時代を元に戻す力は残ってなかったし、後者は、後者で決して琉歌人とは言えなかった。というより、彼等の中には、真に方言表現のみに命をかけたのがいたようには見えないのである。それは、旧派の琉歌人たちが、和歌の作者でもあったといふのとは大きく異なる。旧派の琉歌人たちにとつて和歌は、教養の一つに過ぎなかったといつていい。しかし、琉歌革新を主張した歌人たちは、逆であった。彼等にとつて、方言表現は、もはや

過去のものになりつつあったし、彼等は、共通語表現を、何が何でも獲得しなければならなかった。時代は、大きく方言表現から共通語表現の時代へと変転し始めていたのである。

では大正期の琉歌壇はどうだったのだろうか。時代は短歌や詩、小説などの新しい表現へと向かっていた。大正期に入ると一層その傾向が顕著になり、明治末期に登場した新派琉歌は大正期にはいるとほとんど見られなくなる。一方で旧派は引き続き活動しているもの、かつての盛り上がりは見られず、大正二年には奥武山歌会、垣花琉歌会、燕居会といった明治期から続いた結社が次々と姿を消している。また、大正期に新たに登場する琉歌研究会、三六会などの結社も、長く続くことはなく二、三年で姿を消してしまう。琉歌会に参加する者の高齢化や世代交代が進み、これまでのような結社を維持することが難しくなつていったのだろう。大正になつて初めて登場する結社が琉歌会ではなく琉歌研究会という名称であるのも、琉歌会の質の変化を表しているのかもしれない。

明治末期、琉歌は隆盛期を迎え、そして衰退へと向かつていった。大正期の新聞に掲載された琉歌は明治期の隆盛の名残といつていいかもしれない。しかし、大正期の琉歌を切り捨てるわけにはいかないだろう。明治期の琉歌と同様、大正期の琉歌は詠み歌琉歌の資料として貴重であり、標準語表現へと傾いていく中で詠まれ続けた琉歌が時代をどのように反映しているかという問題を解決するために重要である。琉歌という表現形式で何を表現しえたか、具体的な

作品研究はこれからである。

琉球文学ゼミにコンピュータが取り入れられたのは一九九四年のことであった。翌一九九五年から文部省科学研究費補助金を得て、岡本恵徳先生を研究代表者にした「近代沖縄の文学資料の収集・研究とデータベース化」の共同研究がスタートする。これによって明治・大正期の和歌、短歌、俳句、漢詩、琉歌、詩、小説などの収集と研究が精力的に進められた。そしてこの共同研究の成果の一部として発行されたのが『近代琉歌の基礎的研究』（一九九九年 仲程昌徳 前城淳子共編 勉誠出版）である。本編はこれらの研究成果をふまえ、大正期の琉歌の集成を試みたものである。前著同様、岡本恵徳先生をはじめ、仲程昌徳先生、玉城政美先生など多くの方のご助力をいただいた。また琉球文学ゼミ、沖縄近代文学ゼミの学生には琉歌の収集とデータベース化に協力していただいた。記して感謝申し上げます。

なお本編は平成十四年度と十六年度文部省科学研究費補助金（若手研究（B））の助成を受けて行われた「詠み歌琉歌の基礎的研究」の成果の一部である。

二〇〇五年三月

前城 淳子

目次

はしがき

大正期の琉歌壇―『琉球新報』『沖縄毎日新聞』をもとに―…………… 1

《資料編》

凡例…………… 27

1 結社詠…………… 29

2 琉歌大会詠…………… 169

3 募集歌…………… 199

4 寄稿歌…………… 202